



Title	日本語における心理動詞の格標示について
Author(s)	山川, 太
Citation	日本語・日本文化. 2004, 30, p. 1-20
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/4117">https://doi.org/10.18910/4117</a>
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

<研究論文>

# 日本語における心理動詞の格標示について

山川 太

## 1. はじめに

本稿では、日本語の心理動詞文における格標示について考察を行う。ここでは、心理動詞とは、一般的に理解されているように、感情的・心理的動きや作用を表現する動詞であり、表層主語名詞句がいわゆる「経験者」の意味役割を持つものと規定される。このような心理動詞については、Belletti and Rizzi (1988) や Pesetsky (1995) などの分析があるものの、その多くは、本稿で考察するタイプの心理動詞 (ES 型) ではなく、「経験者」の意味役割が表層目的語名詞句に付与されるタイプ (EO 型) に焦点を当てている<sup>1)</sup>。Katada (1994) も指摘するように、日本語においては、EO 型の心理動詞は「閉じた体系 (closed system)」を成しており、ES 型心理動詞の方が、より無標 (unmarked) で一般的な動詞であると考えられる。本稿の目的は、このような ES 型心理動詞に見られる格標示について明示的な説明を与えることである。

本稿の内容は、大まかに以下ようになる。

- I 格標示される名詞句の意味役割を再考し、今まで与えられてきた意味役割のラベルが適当ではないことを示す。換言すれば、動詞そのものに内在しない意味役割が設定されてきたことを指摘し、心理動詞が有する意味役割を明らかにする。
- II I で明らかにされたことを前提に、語彙概念構造 (lexical conceptual structure) の観点から格標示のヴァリエーションについて分析する。ここでは、語彙概念構造のレベルで心理動詞に語彙規則が適用されると仮定し、意味素の編入という統語論と同様の操作が格標示のパターンを決めることを論証する。また、この操作に意味素の強弱が関わっていることを主張する。

- Ⅲ 本稿での分析によれば、辞書部門 (lexicon) における統語論 (syntax) の存在の妥当性が強化され得ること、また、範疇選択 (c-selection) が必要とされること、を Theoretical implication として提示する。

## 2. 心理動詞の格標示

日本語の ES 型心理動詞は、その格標示の点から大きく三つに分かたれる (Bando (1996))。

- (1) a. 太郎は後輩の変貌に／を悲しんだ  
b. 太郎は数年ぶりの大雪に／を喜んだ
- (2) a. 太郎は後輩の変貌 \* に／を嫌った  
b. 太郎は後輩の世話 \* に／を好んだ
- (3) a. 太郎は先輩の活躍に／ \* をあこがれた  
b. 太郎は後輩の不祥事に／ \* を困った

これらは、それぞれ「対格・与格標示の両方を許容するもの (= (1))」「対格標示のみ許容するもの (= (2))」「与格標示のみ許容するもの (= (3))」と見なせる。Bando (1996:166) は、ES 型の心理動詞をこのような格標示の観点から (4) のように分類した。

- (4) a. 対格・与格標示の両方を許容するもの：  
「喜ぶ」「なげく」「楽しむ」「迷う」「ためらう」「悩む」など
- b. 対格標示のみ許容するもの：  
「愛する」「嫌う」「尊敬する」「信じる」「うらやむ」「あわれむ」など
- c. 与格標示のみ許容するもの：  
「驚く」「びっくりする」「感動する」「あこがれる」「苦しむ」「困る」など

(4) の分類に関しては、話者間でのゆれも見られるが、本稿ではこの Bando (1996) の分類を受け入れておく<sup>2)</sup>。

かかる格標示に関しては、特に (1) のケースについて、主として対格・与格名詞句の意味役割の相違という観点から分析されてきた (Endo and Zushi (1993))。このような分析は、英語の ES 型心理動詞・EO 型心理動詞において従来設定されてきた [THEME] という意味役割を [Target/Subject Matter (of Emotion)] と [Cause]

に定義し直した Pesetsky (1995) とパラレルなものであり、対格標示された名詞句は [Target of Emotion] ([感情の対象]) という意味役割を、与格標示された名詞句は [Cause] ([原因]) の意味役割を持つと分析している (寺村 (1982) にも本質的に同様の指摘がある)。また、Endo and Zushi は、与格標示された名詞句の場合、その心理動詞は非対格動詞であると主張し、与格標示の場合と対格標示の場合とで異なった統語構造を設定している ((5))。

(5) a. NP-NOM (Experiencer)      NP-DAT (Cause)      Pred



b. NP-NOM (Experiencer)      NP-ACC (Target)      Pred

(Endo and Zushi (1993:29))

このような構造を設定することは、Baker (1988) の UTAH (Uniformity of Theta Assignment Hypothesis) や Pesetsky (1995) の Thematic Hierarchy に合致するものであるが、格標示のシステム自体を明示的に説明するものではない<sup>3)</sup>。

本稿では、まず (1) の現象を中心に考察を進め、その分析を (2) (3) タイプにも適用していく、という手順を採る。

### 3. 心理動詞の意味役割

上で触れたように、日本語の心理動詞文において、対格標示された名詞句は [感情の対象]、与格標示された名詞句には [原因] という意味役割が付与されることが考えられてきたが、Bando (1996, 1997) も指摘するように、与格標示された名詞句でも [原因] だけでなく [感情の対象] の意味役割をも持つ場合がある。

(6) a. 太郎がその電話に驚いた

b. 太郎が父の成功に喜んだ

Bando は、(6a,b) のような心理動詞文において、与格標示された名詞句が [原因] [感情の対象] という二つの意味役割を“同時に”担っている解釈が存在すると主張する。この解釈の可能性は確かに存在するものと考えられるが、これは、文を解釈した結果、与格名詞句に対してそのような読みが与えられるということであって、当該の心理動詞そのものに二重の意味役割を付与する能力があることを意味するものではない、と本稿では考える。つまり、(6a,b) に関して Bando が指

摘する解釈 (与格名詞句が「原因」「感情の対象」二つの意味役割を同時に担う) において、心理動詞自体に内在する意味役割はどちらか一方であることになる。

- (7) a. 太郎が驚いたその電話  
 b. 太郎が喜んだ父の成功  
 c. 太郎がものすごい雷の音にびっくりした  
 d. 太郎がびっくりしたもののすごい雷の音

(7a,b) は、それぞれ (6a,b) に関係詞化を施した形であるが、名詞句「その電話」「父の成功」は、「感情の対象」の解釈しか持たない ((6a,b) において与格名詞句に認められた二重の意味役割のうち、「原因」の意味役割はなくなる)。「原因」を表す「に」が関係詞化を許さないことは、井上 (1976) で既に指摘されている。

- (8) a. \* ジョンががっかりしたニュース  
 b. ジョンがニュースにがっかりした

(井上 (1976:170))

- (9) a. \* ジョンが戸惑ったニュース  
 b. ジョンがニュースに戸惑った

(井上 (1976:170))

さらに、Bando が「原因」の解釈しかないとする (7c) における与格名詞句も関係詞化すれば「感情の対象」の解釈しかなくなり、また、その解釈においてのみ適格となる ((7d))。このような事実は、心理動詞にとって、「感情の対象」を表す与格名詞句の方が、「原因」を表す与格名詞句よりもより必須な要素であることを示している。

- (10) a. 教育学者の厳しい意見に息子の放蕩ぶりに苦しんだ  
 b. 彼の親父さんは教育学者の厳しい意見にそうなった  
 (「そうなる」=「息子の放蕩ぶりに苦しむ」)  
 c. \* 彼の親父さんは息子の放蕩ぶりにそうなった  
 (「そうなる」=「教育学者の厳しい意見に苦しむ」)

(10a) は「原因」としての与格名詞句と「感情の対象」としての与格名詞句が単文内に同時に表出した例であるが、(10b,c) に見られるように、“「感情の対象」+動詞”は「そうなる」で置換することが可能である。一方、“「原因」+動詞”

の方では置換は不可能である。この結果は、[感情の対象]を表す与格名詞句が心理動詞の項 (argument) であり、[原因]を表す与格名詞句が項ではなく付加詞 (adjunct) であることを意味している。

(11) a. 太郎はあまりのうれしさに小躍りした

b. 太郎は数年ぶりの大雪に (思わず) 幼なじみに手紙を書いた

(11)に見られるように、[原因]を表す与格名詞句は、心理動詞文に限らず、比較的自由に出沒し得る。

以上から、本稿では、心理動詞に要求される与格名詞句は第一義的には[感情の対象]であり、これまで[原因]という意味役割を担うとされ、項扱いされてきた与格名詞句は付加詞であると分析する。もちろん、(6)におけるもう一つの解釈(与格名詞句が[原因]の解釈のみを持つ)では、与格名詞句は項ではなく、付加詞であると考えられる。

では、(1)に見られるような与格と対格の両方の標示の可能性についてはどのように説明されるのか? 以下では、この問題について考える。

#### 4. 心理動詞の語彙概念構造

さて、上述のように、Endo and Zushi (1993) では、対格標示された名詞句は[感情の対象]という意味役割を、与格標示された名詞句は[原因]の意味役割を持つと分析されているが、本稿におけるここまでの議論では、後者([原因]の意味役割を持つ与格名詞句)が項ではないこと、そして、項としての与格標示された名詞句は[感情の対象]という意味役割を担う、ということが確認された。よって、あくまで項(argument)である限りにおいては、対格標示された名詞句・与格標示された名詞句は同じ[感情の対象]という意味役割を付与されることになる。ここでは、この格標示のヴァリエーションが語彙部門において決定されることを論証する。

まず、分析にあたって、本稿では、Rappaport and Levin (1988)、Grimshaw (1990) や Levin and Rappaport Hovav (1995) などで仮定され、影山 (1993, 1996) や金水 (1994)、三宅 (1996) などの日本語の分析にも採り入れられている以下のような文法モデルを採用する。

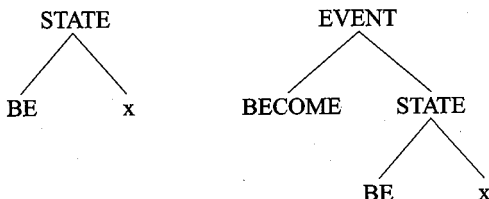
## (12) Lexical Conceptual Structure (LCS)



Argument Structure → Syntax (D-structure → S-structure)

語彙概念構造 (LCS) とは、各動詞の意味概念を語彙分解 (lexical decomposition) の手法で表示したものであり、原始的な意味素 (意味述語) と変項 (variable) から成り立っている。変項とは、いわゆる統語論での項を表す。LCS の語彙情報は、項構造に写像され、つまり、項構造を介して統語構造へと結び付けられる。例えば、“状態”を表す「ある」や“状態変化”を表す「壊れる」などは概ね (13) のような LCS を持つと考えられる。

## (13) 「状態」(『ある』等) 「状態変化」(『壊れる』等)



(三宅 (1996:148))

BE や BECOME が意味素であり、x が項を表す。また、EVENT や STATE は意味素と項から成立する構造を一つの範疇として括ったラベルである。LCS の表記に関しては、いくつかのスタイルがあるが (Jackendoff (1990) と Rappaport and Levin (1988) とではかなり異なっている)、ここでは影山 (1996) や Levin and Rappaport Hovav (1995) などに近い上記の表記法を採っておく。

では、このような LCS を用いて問題の心理動詞はどのように表示されるのだろうか？

本稿では、[原因] の解釈を持つ与格名詞句は付加詞であり、[感情の対象] と解釈される与格名詞句は項であると主張しているが、これを前提に (1) を見てみると、前者の解釈の場合は“悲しむ”“喜ぶ”は一項述語であり、後者の解釈においては二項述語であるということになる。

Katada (1994) は、日本語の *fear* 型心理動詞 (本稿での ES 型心理動詞) は、weak transitive であるとし、辞書内で “intransitivization” という随意的な (optional) 語

彙規則が働くことによって一項述語にも二項述語にもなり得るとしている。これは、その項構造 (argument structure) にも二つの可能性があることを意味する<sup>4)</sup>。

- (14) a. [V (wt) y], x  
 b. [V], x ← Intransitivization

(Katada (1994:69))

(14) における二つの項構造の存在を認めることによって、心理動詞が単独で出現し得る、つまり実質的な目的語 (与格・対格標示される名詞句) に言及することなしに完全な意味内容を表せることが説明される<sup>5)</sup>。本稿でも、結果的に Katada (1994) の考え方を支持することになる。

影山 (1996) は、心理動詞の語彙概念構造として (15) のような表記をしている。

- (15)  $x_i$  EXPERIENCE [ $x_i$  BECOME [ $x_i$  BE AT- [PSYCHOLOGICAL STATE with z]]]

(影山 (1996:125))

影山のこの構造は、まさに二項述語としての構造であるが、一項述語としての可能性についての言及はない。さらに、本稿で設定したような、心理動詞の項に付与される [Target of Emotion] ([感情の対象]) という意味役割を概念構造で表示する場合には、やはり [Target] というだけに、なんらかの“方向づけ”的な概念を表示できる方が望ましいのではないかと考えられる。本稿では、日本語の ES 型心理動詞は、もともと一項述語であり、そこに語彙規則が適用され、二項述語にシフトする、という考え方を採る。つまり、心理動詞の概念構造は基本的には (22) のような表示になると考える。

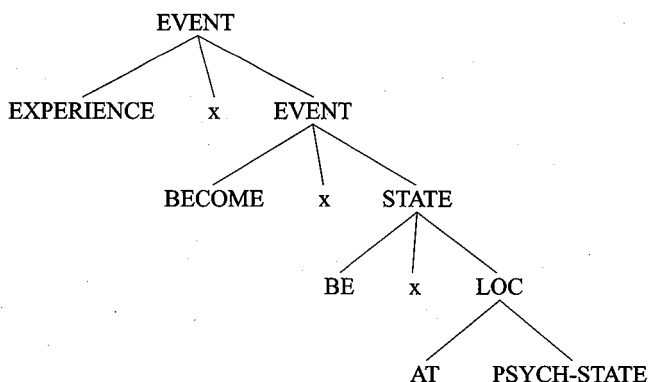
ここで、(22) の構造設定について言及しておく。三原 (2000) は、ES 型心理動詞を事象を表す (eventive) ものと捉え、(16) のようないわゆる Vendler (1967) 分類のうちの「活動動詞」であると説得的に論じている ((17) は (16) に対応する LCS 表示である)。(22) の表示から分かるように、本稿でも、日本語の ES 型心理動詞が eventive なものであるという点では三原 (2000) に同意するが、それが活動動詞であることは採用していない。もし、心理動詞が活動動詞であるとしたら、その LCS 表示は (17b) のようになるわけだが、そうすると、Tsuji-mura (2001) で分析されている副詞「とても」の修飾が説明されない。分析の詳細は



Tsujimura (2001) を参照されたいが、Tsujimura は、(18) (19) および (20) (21) の (不) 適格性から、副詞「とても」の修飾 (「程度」修飾) を許す動詞の条件の一つとして、その動詞の LCS に STATE 範疇が存在しなければならないことを挙げている。この指摘が正しいとすれば、心理動詞を単に「走る」「笑う」などと同様の活動動詞のカテゴリーに含めるのは問題であろう。しかしながら、そもそも Tsujimura は ES 型心理動詞を eventive なものではなく、状態を表すもの (stative) であると考えているので、本稿のように ES 型心理動詞を eventive 扱いする分析とは即座には相容れない。また、心理動詞の LCS を [y BE <state>/AT <place>] のように分析するということは、当該の心理動詞が内項のみからなる一項動詞であることを意味するが、本稿では、ES 型心理動詞が対格標示を許容することに鑑み (「外項を有する動詞のみが対格を付与できる」という Burzio の一般化 (Burzio (1986)) による)、(22) の LCS 表示の段階において外項としての x を意味素 EXPERIENCE の変項として導入してある<sup>6)</sup>。このように、本稿の (22) は、事象的 (eventive) であるという点、そして STATE を含むという点において、三原 (2000) と Tsujimura (2001) の分析を融合させた折衷的構造であると言える。

- (16) a. 「状態動詞」 (state)
- b. 「活動動詞」 (activity)
- c. 「到達動詞」 (achievement)
- d. 「達成動詞」 (accomplishment)
- (17) a. 「状態動詞」 : [y BE <state>/AT <place>]
- b. 「活動動詞」 : [x ACT (ON y)]
- c. 「到達動詞」 : [BECOME [y BE <state>/AT <place>]]
- d. 「達成動詞」 : [x ACT (ON y) ] CAUSE [BECOME [y BE <state>/AT <place>]]]
- (18)\* 太郎はとても走った
- (19)\* 太郎はとても笑った
- (20) 太郎はとても喜んだ
- (21) 太郎はとても苦しんだ

(22)

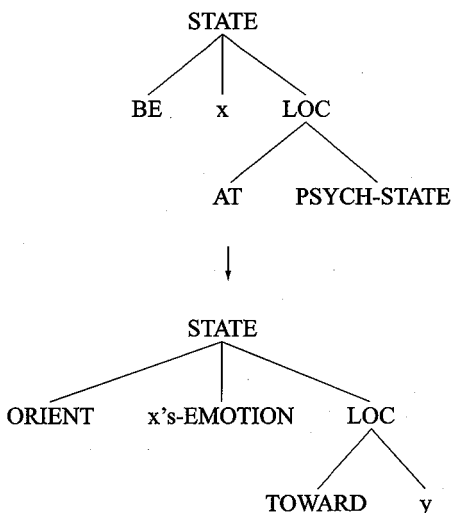


Bando (1997) は、以下の (23a,b) のような例を挙げ、「喜ぶ」「びっくりする」などの心理動詞の意味には、「外的」に心理状態を変化させる「原因」が含意されていると主張し、概念構造において CAUSE という意味素を導入しているが、本稿での「原因」は付加詞であり、項でない以上、動詞の概念構造で表示する必要はない、ここでは考えておく。

- (23) a. \* 太郎は自然にびっくりした  
b. \* 太郎はひとりでに喜んだ

(22) の概念構造は、x という一項（「経験者」）しか含まれておらず、この構造が項構造へ写像されると、当然、一項述語としての項構造が得られる。では、二項述語としての可能性をいかに保証するか、という問題であるが、本稿では、(24) の語彙規則が概念構造で適用されると仮定する。

(24)



(24) の語彙規則は、丸田 (1998:63) が *John is angry* の *angry* が一項述語として用いられる場合と二項述語として用いられる場合がある事実を説明するために設定した規則を修正したものである。丸田の提案する規則は (25) のようになっている。 “項 *x* が項 *y* の方向を向いている” というような状態を概念化している。

(25) [BE [*x* PSYCHOLOGICAL STATE]] → [ORIENT [*x* TOWARD-*y*]]

(丸田 (1998:63))

しかしながら、*John is angry at trifles*. においても、また (1) のような場合も、項 *y* (*trifles*、[後輩の変貌][数年ぶりの大雪]) の方向を向いているのは *John* でも「太郎」でもない。[Target of Emotion] ([感情の対象]) の方向を向いているのは “項 *x* の感情” なのである。本稿では、この点を考慮に入れ、(24) のような表示を持つ規則を提案している。ちなみに、ORIENT という意味素は Jackendoff (1990) で用いられているもので、*The sign points toward New York*. という文に見られるような “モノの方向づけ (orientation of objects)” という概念を規定する。(24) では、[経験者] の感情を一種のモノとして捉え、その方向づけを表示しているわけである。

このような語彙規則は、語彙概念構造レベルでの規則であり、(22) に適用されれば、二項述語としての項構造が派生され、適用されなければ、一項述語として

の項構造が派生される。これは、一項述語の概念構造に規則がかかるとしている点で Katada (1994) とは異なっているが、本質的に (14) の思想を語彙概念構造レベルで捉え直したものである。このように、Katada が項構造レベルで保証したことを語彙概念構造レベルで行うことは、本題であるところの格標示のヴァリエーションについて考えるにあたって必要となる。

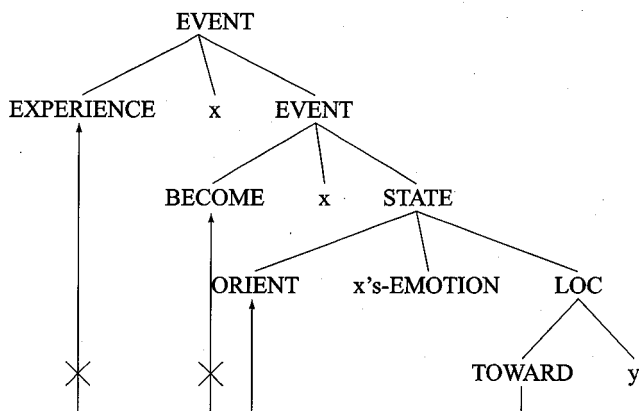
## 5. 語彙部門での統語論

ここでは、心理動詞の語彙概念構造と語彙概念構造レベルで適用される語彙規則をもとに、格標示の問題にどのような説明が与えられるかを考える。

まず、(1) のような「対格・与格標示の両方を許容するもの」について考えてみる。この場合は、名詞句がどちらの格で標示されても「感情の対象」を表すが、日本語において、与格は様々な意味を有し (城田 (1993))、具体的な意味を直接担う格だとすれば、与格こそが「感情の対象」という意味役割を直接反映する意味格 (後置詞と呼んでもいいかもしれない) であると考えられる。この点で、この与格 (= 格) は、迂言的な「〜に対して」の異形態と言えるかもしれない。一方、城田 (1993) が言うように、対格が表すのは文論的機能 (文法関係) だけであり、ゆえに、対格は三宅 (1996) が言うところの“意味的に空虚な”格であると考えられる。

本稿では、三宅 (1996) に従い、(1) でのような対格標示によって「感情の対象」という意味役割が表される場合には、本来の意味役割の意味というものは当該動詞の意味に取り込まれているものとし、その“取り込み”は語彙概念構造における意味素の編入によって起こるものとする。 (1) での「悲しむ」「喜ぶ」という動詞の概念構造が (22) のまま、つまり (24) の語彙規則が適用されずに項構造へと派生が進むと、一項述語の項構造が得られ、そこには「感情の対象」という意味役割は内在されない。その述語に与格名詞句が共起したとしても、それは「原因」の付加詞である。よって、対格・与格両方で標示される可能性を有するのは、(24) の規則がかかった (26) の概念構造でなければならない。

(26)



(26)の概念構造で、[感情の対象]という意味役割を直接反映するのは TOWARD であると考えられる。この TOWARD がこの位置に留まっていれば、「目標格」とでも言うべき意味的格の与格として実現する。上で述べたように、対格標示の場合には、この TOWARD が他の意味素へ編入する必要がある。Baker (1988) での「編入」は  $\alpha$  移動の一形式であり、また、三宅 (1996) の言うように、語彙概念構造での編入も  $\alpha$  移動での制約に従うとするならば、TOWARD の可能な編入先は ORIENT の位置であるということになる。BECOME や EXPERIENCE に編入すると、Chomsky (1986) での HMC (Head Movement Constraint) や Rizzi (1990) の Relativized Minimality に違反することになるからである(ここでの BECOME や EXPERIENCE、ORIENT などは EVENT や STATE の主要部 (head) である)<sup>7)</sup>。

続いて、(3)の「与格標示のみを許容するもの」に関して考えてみる。(1)に関して行った分析と同様に、語彙概念構造レベルでは (22) の可能性と (26) の可能性がある。対格標示できないということは、(26)の構造において編入を起こしてはいけないというふうに考えられる。これをどのように説明すればよいのか? 本稿では、意味素の強弱が編入という操作に影響を与えるということを主張する。

本稿では、影山 (1996:58-59) で言われているような“意味述語の際立ち (saliency)”を意味素の強弱として考える<sup>8)</sup>。

(27) a. 団体客が1時間で到着した

b. \* 団体客がしばらく到着した

(28) a. 到着する : BECOME [y BE AT-z]

b. BECOME [y BE AT-z]

↑            ↑

一時間で \*しばらく

影山は、(27a,b) の対比の理由を (28) のような概念構造での修飾の可否を求める。つまり、(27b) では、意味素 BECOME が際立っているので、BECOME だけが修飾され得る、と考えている。本稿では、このような意味素の際立ちを“意味素の強さ”と見なす。

(29) a. 太郎はしばらく悲しんだ

b. ?? 太郎は数秒で悲しんだ

c. 太郎はしばらく喜んだ

d. ?? 太郎は数秒で喜んだ

e. 太郎はしばらく楽しんだ

f. \* 太郎は数秒で楽しんだ

(30) a. ? 太郎はしばらく驚いた

b. 太郎は数秒で驚いた

c. ? 太郎はしばらくびっくりした

d. 太郎は数秒でびっくりした

e. 太郎はしばらく苦しんだ

f. 太郎は数秒で苦しんだ

g. 太郎はしばらく困った

h. ? 太郎は数秒で困った

(29) の結果から、(1) タイプの心理動詞の概念構造での強い意味素は BE であると仮定する。そして、この強い意味素が編入先としての候補になると考える。(26) においては、ORIENT が (22) の BE に対応するので、TOWARD がこの ORIENT へ編入すれば、対格として表層で具現化するような項構造が派生される。編入しなければ、与格として具現化するような項構造になる。(30) では、一見、各動詞の概念構造において意味素の強弱を決定するのは困難のように思われる。今、仮に、(30) の結果から、(3) タイプの心理動詞の概念構造においては、

BECOME が強い意味素であるとする。(1)タイプに関する議論と同様に、BECOME が編入先としての候補になる。編入を起こさなければ、与格標示になるが、BECOME 位置に編入すると、結果として HMC (Head Movement Constraint) や Relativized Minimality に抵触する。よって、対格標示の可能性はなくなる。しかし、(3) タイプの動詞の格標示に関しては多くの話者がゆれを感じるようである。

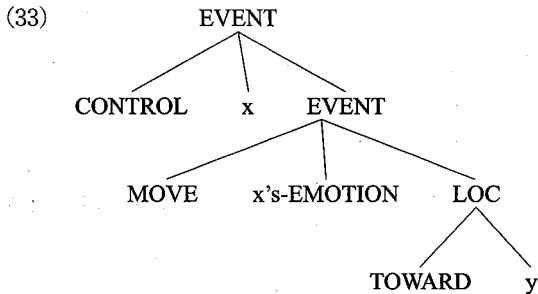
- (31) a. 太郎が妹の結婚を驚いた  
 b. 太郎が妹の結婚をびっくりした  
 c. ?? あんな映画を感動したなんて、信じられない  
 d. 太郎は友人の失敗を苦しんだ  
 e. 太郎は妹の事件を困っている

(31) は (3) タイプ (与格標示のみ許容するもの) であるが、全てかなり容認度は高い。このことから、以下のようなことが言えるように思われる。(3) タイプの動詞に関しては、意味素の強さを決定するのが困難であるゆえに、格標示についてもゆれが見られる。つまり、(3) タイプの動詞の概念構造での強い意味素を BE((26)での ORIENT) であると判断する話者は対格標示をも許容し、BECOME を強い意味素であると判断する話者にとっては与格標示しか許されないことになる。ここで、(3) タイプの動詞のうち、「あこがれる」に関して付言しておかねばならない。(1) や (3) タイプの動詞が、付加詞としての与格名詞句 ([原因]) のみが共起しただけでも完全な意味内容を表せるのに対して、「あこがれる」はそうではない。

- (32) a. \* 太郎はその職業にあこがれた ([原因] の読み)  
 b. \* 太郎はその俳優にあこがれた ([原因] の読み)

これは、「あこがれる」が一項述語としての資格を持ち得ないということである。しかし、(26) の概念構造はあくまで規則適用の結果であり、「あこがれる」がもともと (26) の概念構造を持っているとは考えにくい。本稿では、「あこがれる」に関しては、[原因] の与格名詞句 (付加詞) だけでは完全な叙述が不可能な (2) タイプの動詞と同様に扱うべきであると考え。 (2) タイプの動詞は、付加詞としての与格名詞句のみが共起しても不完全な叙述になり、また対格標示のみを許容することから、実質の他動詞であり、概念構造も (1) や (3) タイプとは

異なった (33) のような構造を最初から持っているとは仮定する。



(33) の構造は、いうなれば“感情の移動”を表示するような構造である。(2) タイプの動詞は (1) や (3) に比して意志性が高いので、CONTROL という意味素を設定してある。(2) タイプでは対格標示のみが許容されるが、(33) において TOWARD の MOVE への編入によって対格標示が保証され得る。なお、ここでは編入が義務的に起こらねばならない。また、(3) タイプの「あこがれる」も (33) の概念構造を持つものと考えられるが、この場合は編入が起こってはならないことになる。これらの場合の編入操作に関する制約がどこに起因するものなのかは、ここでは明確な説明を与えることはできない。(33) の構造を提案するにとどめておく。

## 6. おわりに (理論的含意)

本稿では、語彙概念構造レベルでの編入操作が格標示を決めるということを論証したが、語彙部門での統語操作は三宅 (1996) や影山 (1993) でも仮定されており、とりわけ後者のモジュール形態論によって、語彙部門における統語論の存在は広く認められてきたと思われる。本稿での分析は、その方向性が正しければ、かかる語彙部門のオーガニゼーションの妥当性を強化し得るものと思われる。

また、本稿では、語彙概念構造レベルにおいて格標示のヴァリエーションが決定され得ることを論証したが、これは動詞の統語的な補部 (項) の範疇 (PP なのか NP なのか) が概念構造で決定されるということである。概念構造で決定された情報は、項構造に反映される。統語的な選択に関しては、意味選択 (s-selection) さえあればそこから自動的に予測・決定されるとする「規範的構造具現 (canonical



structural realization)」の考え方が一般的であると思われるが、本分析によれば、いわゆる項構造での範疇選択 (c-selection) は必要であることになる。本稿において、LCSから項構造へと派生される情報は、まさに範疇に関する情報 (PP <TOWARD> or NP) であるからである。

最後に、本稿で主張したことをまとめておく。

- I 今まで ES 型心理動詞の項として扱われてきた「原因」という意味役割を有する与格名詞句は付加詞であって、項ではない。よって、かかる (二項述語としての) 心理動詞に内在する意味役割は、「経験者」および「感情の対象」であるということになる。
- II 本稿では、ES 型心理動詞は LCS レベルでは一項述語として登録されると分析され、そこに語彙規則がかかることで、ES 型心理動詞が一項述語にも二項述語にもなり得るということが保証される。また、「感情の対象」という意味役割を有する名詞句の対格・与格標示については、意味素の編入によって説明される。そして、この意味素の編入という操作には、意味素の強弱が関っている。
- III 辞書部門 (lexicon) における統語論 (syntax) の存在の妥当性が強化され得る。また、意味選択 (s-selection) だけでなく、範疇選択 (c-selection) も必要であることが導かれる。

#### 註

- 1) 三原 (2000) は、日本語の ES 型心理動詞を包括的に分析した数少ない研究の一つである。
- 2) 例えば、Bando (1996) による (4a) の分類からすると、次の (a) 文における与格標示も許容されるはずであるが、Katada (1994:68) はこれを不適格と扱う。  
(a) 花子が音楽を／＊に楽しんだ
- 3) UTAH (Uniformity of Theta Assignment Hypothesis) とは以下のような仮説である。  
(b) UTAH: Identical thematic relationships between items are represented by identical structural relationships between those items at the level of D-Structure.

(Baker (1988:46))

Thematic Hierarchy とは、以下のような意味役割 (thematic role) の階層のことであ

り、階層が上位の意味役割は統語構造においても上位位置に写像されると想定されている。

(c) Causer > Experiencer > Target/Subject Matter

(Pesetsky (1995:59))

- 4) (14a) における [ ] 内の y は内項を、x は外項を指している。
- 5) Katada (1994:68) は、(e) と (f) を明らかに異なったものとして区別している。つまり、目的語が抑制 (suppress) された (f) が許容されるのは空の代名詞的要素 (null-pronominal:pro) が存在するからであって、「盗む」という他動詞が自動詞として用いられているということではなく、あくまで目的語の存在は含意されていると考えている。これに対して、(e) 文は目的語に言及することなしに、完全な命題を記述し得ている、とされる。言い換えれば、(e) 文の「悲しむ」は自動詞として用いられていると見なされる。

(d) 花子が同僚の裏切りを／に悲しんだ

(e) 花子が (とても) 悲しんだ

(f) 花子が pro 盗んだ

- 6) Tsujimura が、ES 型心理動詞を内項のみからなる一項述語であると見なすのに対し、(22) の LCS では外項のみからなる一項述語であると表示される。
- 7) HMC (Head Movement Constraint)、Relativized Minimality は以下のように規定される。

(g) HMC: Movement of a zero-level category  $\beta$  is restricted to the position of a head  $\alpha$  that governs the maximal projection  $\gamma$  of  $\beta$ , where  $\alpha$   $\theta$ -governs or L-marks  $\gamma$  if  $\alpha \neq C$ .

(Chomsky (1986:71))

(h) Relativized Minimality: X  $\alpha$ -governs Y only if there is no Z such that

(i) Z is a typical potential  $\alpha$ -governor for Y,

(ii) Z c-commands Y and does not c-command X.

(Rizzi (1990:7))

- 8) 三原 (2000) は、以下の (i) (j) のような例における「～で」を「開始読み (動作の開始に要する時間)」においてのみ成立するとする。確かに、「太郎は 1 分で笑った」というような文において、「1 分で」は「開始読み」しか許さない。しかし、(i) において、「1 分かかって、諦め始めた」のか「1 分かかって、諦め」という状態になった」のかは非常に曖昧に感じられる。本稿では、かかる心理動詞の内容は、「開始」=「終了」を表すものと考えておく。

(i) 進は問題を見て 1 分で諦めた

(j) 僕はここに来たことを 10 秒で後悔した

(三原 (2000:67))

そう考えた上で、(29d) の「?? 太郎は数秒で悲しんだ」と (30b) の「太郎は数秒で驚いた」を比べると、「数秒で」が「開始読み」であろうと「終了読み」であろうと、この二文の間には認容度の差が確かにあると感じられる。

ここで仮定した意味素の強弱は、いわゆるミニマリスト・プログラム (Chomsky (1995)) での strong/weak feature を想起させる、という御指摘を何人かの方から頂いた。また、このことと関連して、本稿での LCS における議論をそのまま統語論 (syntax) として処理できる可能性があるのではないか、というコメントを下された方もおられた。このような問題については、今後の課題としておきたい。

### 参考文献

- Baker, M. (1988) *Incorporation*, University of Chicago Press
- Bando, M. (1996) "Semantic Properties of -*Ni* NP and -*O* NP of Japanese Psych-verbs," 『大阪大学言語文化学』 第 5 号, 165-177
- Bando, M. (1997) "The Lexical Properties of Japanese Psych-Verbs and -*ni* NPs," *Kansai Linguistic Society* 17, 154-164
- Belletti, A., and L. Rizzi. (1988) "Psych Verbs and  $\theta$ -Theory," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 291-352
- Burzio, L. (1986) *Italian Syntax*, Reidel
- Chomsky, N. (1986) *Barriers*, MIT Press
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press
- Endo, Y. and M. Zushi (1993) "Stage/Individual-Level Psychological Predicates," in H. Nakajima and Y. Otsu (eds.) *Argument Structure: Its Syntax and Acquisition*, Kaitakusha
- Grimshaw, J. (1990) *Argument Structure*, MIT Press
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 (上)』 大修館書店
- Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures*, MIT Press
- 影山太郎 (1980) 『語彙の構造』 松柏社
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 くろしお出版
- Katada, F. (1994) "Pseudo Intransitives and Weak transitives," in M. Nakamura (ed.) *Current Topics in English and Japanese*, Hituji Syobo
- 金水 敏 (1994) 「連体修飾の『～タ』について」 『日本語の名詞修飾表現』 くろしお出版
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity*, MIT Press
- 丸田忠雄 (1998) 『使役動詞のアナトミー』 松柏社

- 三原健一 (2000) 「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」『日本語科学』8, 54-75
- 三宅知宏 (1996) 「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』第110号, 143-168
- Pesetsky, D. (1995) *Zero Syntax*, MIT Press
- Rappaport, M. and B. Levin (1988) "What to Do with  $\theta$ -roles," in W. Wilkins (ed.) *Thematic Relations*, Academic Press
- Rizzi, L. (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press
- 城田 俊 (1993) 「文法格と副詞格」『日本語の格をめぐって』くろしお出版
- Tsujimura, N. (2001) "Degree Words and Scalar Structure in Japanese," *Lingua* 111, 29-52
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- Vendler, Z. (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press

本稿は、国語学会平成12年度春季大会（於：専修大学）において口頭発表した内容に加筆・修正を施したものである。発表当日および発表前後の段階で多くの有益なコメントを下された先生方に心から感謝申し上げる。貴重なご意見・ご批判を本稿中で生かしきれていないとすれば、本稿中の不備・誤謬とともに全て筆者の責任である。

〈キーワード〉 ES型心理動詞, 格標示, 意味役割, 語彙概念構造, 編入, 意味素の強弱

## On Case Marking by Psych Verbs in Japanese

Futoshi YAMAKAWA

The aim of this paper is to investigate accusative/dative case marking by psych verbs (subject-experiencer verbs: ES type) in Japanese.

It has been considered that the  $\theta$ -role [CAUSE] is intrinsic to the psych verbs, that is to say the [CAUSE] NP has been viewed as an argument. In this paper I argue that the [CAUSE] NP is not an argument but an adjunct, and the role of an internal argument of ES type psych verbs is [Target of Emotion] whether the argument NP is marked with the accusative case or the dative case.

Furthermore, I give an optimal explanation to accusative/dative case marking by the psych verbs in the lexical conceptual structure (LCS) of the verbs. It is claimed that ES type psych verbs have an intransitive representation in the LCS, and if the optional lexical rule applies the transitive representation will be derived. In this point, transitive/intransitive status of the psych verbs can be maintained in the LCS.

Additionally, the operation, "Incorporation" in the LCS is assumed. When TOWARD which corresponds to the role [Target of Emotion] is incorporated into other semantic primitive, such an argument structure as permits accusative case marking will be projected from the LCS. If this incorporation is blocked, such an argument structure as permits only dative case marking will be projected. I also claim that strong/weak distinction of semantic primitives plays an important role for the incorporation as a triggering factor. The analysis presented in this paper leads to the claim that the so-called "c-selection" is necessary.